

しどぞ、御城廻りより東地屋根の瓦を碎き、堀をくづし、腰板など炮丸の打たる如く、ふかき跡附しどぞ、鳥燕雀など多く損じける由、本所邊猶強く、家のくづれたるも多かりしとなり、芝青山の邊は、一旦夕だち立たるばかりなり、粟のふることはときぐれあれども、かゝる事は終に聞ず、是につきて四五日前、秩父山より初て、川越の城則忍夫郡三吉野の里といふあたり、大なる粟降て、麥をことぐれくに打つぶしけるとぞ。

〔農驗〕第四 天災地變の事 卯年〇天明 因作にてき、んたりし事、天よりは災を降し、地にも變ありしよりおこれり、其故は前年の寅の冬より、氣候いつもとは大きにたがへり、夫冬はさむかるべきにさはなく、其十二月甚あたかにて、まづ菜種の花などさきそろひ、又は筍を生じ、陽氣春に似て三月比のごとし、且時ならざる雷雨度々あり、殊に大坂にては、御城の門に雷おちて焼しと聞えし、極月にかくある事は、前代未聞の天災たりとて、人々おそれをのけり、扱其年も暮て、明れば卯の年となりぬ、此春はなほさら暖ならんとおもひしに冬とは引かはりて、寒氣甚しくありけり、其上雨のふる日おほくして、晴天はまれなりし、されども夏に及びしに、麥作はいつもさまでのちがひもなくとりけり、かくて五月になりぬれば、暑氣の節たれどもさはなくて、田植の時にいたれども、餘寒なほさらず、人皆綿入を著て、火にあたるほどなれば、此さむさには、作物不熟たらんと察せられしかば、穀物の直段諸國一同大きにあがれり。

〔閑窓自語〕六月寒事 寛政五年六月二日、土用北風ふきてひや、かかる事、八九月のごとし近來たえてき、も及ばぬ事なり、三日ばかりにて風も吹きかはり、氣候もなほりぬ、のちにきく、北國には雪ふりて、うすくつもれり、越後には三寸ばかりありけりとなん。

〔草山集十六〕饑年有感

八月雨猶少、引流理水車、途窮人棄子、林瘦竹生花、荒草穿龜背、亂虫入犬牙、自驚清福足、香飯及芳茶、